

月の人

「もしかしたら月に帰っちゃったのかもねえ」

一瞬、息を吐くのを忘れた。

「ほら、かぐや姫みたいに」

母さんはそう言いながら、ゆつくりとコップを回している。ビールはその度に、シュワシュワと小さな泡が表面に浮かんでいた。母さんの目は半分ほどしか開いておらず、今にも眠ってしまいそうだ。ふう、と俺は浅く息を吐いた。

「そんなわけないやろ」

「そう？ ロマンがあるかなって思ったんやけど」

ふっと、母さんは息を漏らした。

「大体、かぐや姫って……。兄貴は男やし」

「そういうことじゃなくて……」

母さんの言いたいことの意味が判然としない。やはり

則直真衣

酔っているのだろう。ちらりと斜向かいにいる哲人さんへと目を向けた。哲人さんは母さんの言葉に何か言うわけでも無く、うん、と静かに頷いていた。

「じゃあかぐや王子？ いいかな、うん、そないしよ……。とにかくな、お兄ちゃんは今に帰ったんよ。今ごろ可愛い女の子達と一緒に、御馳走食べて、今度地球に帰ってきたときは三〇〇年くらい経つてて」

かぐや姫だと言っていたのに、途中から浦島太郎の筋書きに変わっている。そう思ったものの、口を挟まずに聞き流した。

「明日」

消え入りそうな声で、母さんはぼつりと呟いた。それ以降は机に突っ伏したまま、もう何も言わなかった。規則的な呼吸の音だけがしていて、その音がするたびに丸

まった背中中は小さく上下していた。

何だか母さんが小さくなってしまうように見える。

皺だつて増えていた。母さんは会うなり、アンタ大きくなった？ と聞いていたが。前に会ったのはいつだったか。ああそうだ、確か、去年の夏休みの帰省でだ。今年の夏はアルバイトが忙しくて帰れなかった。

多分今年の年末も、母さんからの、あの電話が無ければ帰ってこなかっただろう。

「今日、仕事で忙しかったらしくてな、疲れとつたみたいや」

ぼんやりと考え込んでいるうちに、哲人さんは押し入れから毛布を取り出していた。その様は俺よりも手慣れている。きつと、哲人さんの方が、この家のどこに何があるのかよく知っている。

「真司くん」

哲人さんが母さんに毛布をかけながら、俺の名を呼んだ。

「ごめんな」

哲人さんの声は柔らかい。この人の性格そのものを表したような声だ。初めて会った、高校二年生の時から変わらなない。

「しゃーないっすよ、どうせ、いつかは片付けなきゃ駄目だし、それが明日ってだけっすよ」

努めて明るい声を出して、缶ビールに口をつける。哲人さんと話すときは、自然と口角が上がる。意識していないのに勝手にこうなってしまう。止めた方がいいんだろうとは分かっているが、これはもう反射みたいなもので、考えるよりも先に表情は動いてしまう。

「それより、いつくらいに、引越すんです？」

「ああ、恵さんが来月にはと……」

恵さん、というのは母の名だ。じゃあその時に籍も入れるんだろうな、とボンヤリと思った。そうっすか、と言った俺に対して、哲人さんはもう一度すまないと謝った。

「あ、いや、哲人さんの家の方が母さんの職場も近いんだし。いいことだらけじゃないっすか」

ちよつとトイレ行つてきます、と聞かれてもいないのに口にして、腰を上げた。

居間である和室を出ると、キッチンの冷えた空気が全身を包む。肩を竦めながら、すーつと細く息を吐いた。和室の襖を静かに閉め、隣の部屋のドアに手を掛ける。音が響かないように、そつとドアを開けると、むつと籠った空気のおいがした。

部屋はシンとしていて静かだ。部屋が丸ごと化石になつてしまったような、そんな気味が悪いくらいの静かさだった。部屋に入ると、空気のとどみが一層肌で感じ

られた。

部屋のカーテンは少しだけ開いていて、そこからすうっと一直線に、暗い光がさしていた。その光は枕もとの目覚まし時計を照らしている。俺がこの家を出る前には、あの時計は動いていたはずだ。十時五十分をさしたまま、時計はピクリともしない。この部屋だけ、あの日から時間が止まっている。

小さな本棚の、一番上の棚の右端。ほとんど手探りで、一冊のノートを取り出す。A4の、白いノート。パラパラと捲ると、自動的にノートはある箇所で止まる。そのページの端が破られているのは、暗がりでも分かった。そつと破れたページを指でなぞる。

——お兄ちゃんの部屋を、片づけようと思うんだけど。電話越しの、母の声が目元で聞こえた気がした。

「ちよつと月を見てくる」

それが兄貴の最後の言葉だった。

財布や携帯、お気に入りの服や靴も全部そのままにして、そのまま帰ってこなかった。俺が少しでも触ると嫌な顔をしていた、あんなに大事にしていたギターさえも置いて、ふつと姿を消してしまった。

未だに兄貴がどうしてあんなことを言ったのか、よく分からない。兄貴はプラネタリウムに行くと十分も経た

ずに欠伸をしていたし、今晩は流星群が流れるんだと母さんが言っても、へえ、という返事以外をしたことがなかった。それなのに、あの日だけは別だった。おかしかった。

その、兄貴のおかしな最後の言葉を聞いたのは俺だけだった。

母さんは仕事が遅くなると言っていたし、父さんは俺が小学生の頃に死んでいたから、その日家には、俺と兄貴しかいなかった。

兄貴の最後の姿は、何よりも鮮明に思い出せる。おかしい最後の言葉。ジーンとよれよれになったTシャツ。根元が黒くなっている茶髪。何も持っていない両手。曲がった背中。首筋の黒子。

あの時に、何で、とか俺も行くとか、声をかけていれば。そう言っていれば兄貴は行ってしまわなかったのだろうか。月を見に行きは、しなかったのだろうか。そんな「もしも」は今でも考える。

兄貴が失踪してから、もう七年。

兄貴は、ちょうど二十歳だった。そして俺も、今年で二十歳になった。とうとう、兄貴の年齢に追いついてしまった。

兄貴の部屋は、最後に見た時と何も変わっていないかつ

た。脱ぎっぱなしのパジャマも、書き込みが途中の楽譜もそのままだ。「帰って来た時、勝手に片づけて、物の場所変わってたら謙一困るだろうし」と母さんは言っていた。結局その気遣いも、役には立たなかった。

母さんが静かにカーテンを開けると、鋭さを持った陽の光が部屋に差し込んでくる。照らされた空気中の埃が、雪のように宙を舞っていた。

「どこから片付けようかなあ」

「タンスからしたら？」

「じゃあお母さんが袋に入れるから、アンタはタンスから服、全部出してくれる？」

りょーかい、と言いながら、タンスを開けると、ギシッと軋む音がした。畳まれた服を一掴みずつ、床の上に置く。一段終わればもう一段、と同じような要領で服をタンスから出し続けた。動作一つする度に、埃は宙を飛び交っていた。

母さんは懐かしい、と服を一枚一枚取り上げる度に顔を綻ばせていた。

「アンタ、これとか着ない？」

「いや、俺と兄貴、趣味全然違うし」

「あらそう」

まだ着れそうなんだけど、と言いながら、母さんは服を袋の中へ入れていく。積み上げられた服が、少しずつ

ゴミ袋の中へ移動していく度に、母さんの目には寂し気な影が映っているような気がした。俺はなるべくそれに気づかないように、次から次へと服を引っ張り出した。兄貴の服は、ゴミ袋を半分ほど埋めて、タンスの中から無くなった。

「じゃあ次は、机の周り片付けよっか」

机の周り。俺はチラリと本棚に目をやった。俺はまだ迷っている。あのことを言うべきだろうか。

「あの、さ」

うん？ と母が振り返る。

「どうしたの？」

「えっと……」

ケホ、と軽い咳をした。

「やっぱり先に、埃の掃除した方がよくね？ 喉、何か痛いし」

「それもそうやなあ……、じゃあお母さん、ちょっと雑巾取ってくるね」

母さんが部屋を出て、姿が見えなくなるまで目で追った。居間の押し入れが開いた音が聞こえたのを確認して、本棚のノートを手を取った。散々迷った末に、俺はノートをゴミ袋の奥に押し込んだ。服で隠れて、ノートがあることは外からは分からなかった。

ギシ、と床が軋む音が聞こえて、ゆつくりとゴミ袋の

側を離れた。そして本棚から数冊の本を取り出して、また床の上に置いた。

「あら、もうそっち片付けてる？」

「うん」

ちよつと早いわよ、と言いながら母さんは俺の隣に腰を下ろす。

「ああ、これ懐かしいなあ……、ほら、これアンタも使った、高校の参考書。お兄ちゃんも、これ使ってよく勉強してた……」

「うん」

母さんは目尻にキュッと皺を寄せる。

やっぱりこれで正しかった。黙っていて、正解だった。正しいはずなのに、胸が少しだけ痛い。

兄貴が消えた時、俺と母さんは必死に探した。警察に捜索願も出した。兄貴は財布も携帯も何もかも置いていったから、何か事件に巻き込まれて帰れなくなっただんじゃないかと、母さんは顔を真っ青にしていた。警察署に直談判もしていた。でも兄貴はいつまで経っても見つからなかった。

兄貴はいなくなるその日まで、ちゃんと授業に出ていたしバイトのシフトも提出していたし、週末には彼女とデートの約束もしていたし、友達だって大勢いた。いな

くなる理由なんて、何一つなかった。

母さんは死んだ父さんの親戚や、携帯電話に登録されていた兄貴の知り合いに片っ端から電話をかけていた。

母さんが電話をかけている間、俺は兄貴の部屋に何かメモや書置きが残っていないか探した。兄貴がバイトで遅くなる時や、出掛ける時にはよくそうやって、俺にメモを残していた。けれどいくら探しても、どこにもそんなものはない。もしかしたら本の中に挟んであるかもしれないと、俺は本棚を覗き込んだ。高校の参考書、何かの小説、ギターの入門書がぎつちりと詰まっていた。その一番右端に、本ではなくノートが背を向けて並んでいた。もしかしたら兄貴が何か書き込んでいるのかもしれないと、俺はノートを手に取った。A4のノートは比較的まだ新しく、表紙にあまり傷はついていなかった。

最初のページあたりには大学の授業内容や、ギターのコードが見覚えのある字で書かれていた。読めない漢字もあったが、兄貴が急にいなくなる理由のようなものは書いていなかった。段々とノートの書き込みは少なくなつて、テストの予定を最後に白紙が続いた。ここにもないかと思ったらノートを閉じようとして、違和感を覚えた。明らかに白紙である、後半のページがやけに開きやすくなっていた。何だろうと思い、俺はそのページを

開いた。

『死にたい』

ガツン、と頭を殴られたような衝撃だった。慌ててノートを閉じ、咄嗟に部屋の入口を見た。変わらず「すみません、もしかしてそちらにウチの謙一が——」という母さんの小さな声が聞こえてくるだけだ。

もう一度ノートを見ても、見間違いなどではなく、確かにその四文字があった。その言葉を打ち消すかのように、文字の上にはぐしやぐしやに横線が引かれていた。

ごくりと唾をのんで、俺はゆっくりとそのページを破り始めた。ぴりぴり、ぴりぴりと静かに立てる音がうるさくて、母さんに聞こえはしないかと心配だった。

「真司」

気がつくくと、母さんが部屋の前に立っていた。ページの切れ端をぐしやりと握りつぶして、「なに？」と聞いた。

「何しとるん？」

「メモとか、書置きとか、そういうの残ってへんかなって」

「あった？」

「……ううん」

そう、と母さんは落胆したような声を出して静かに居間に戻って行った。母さんの電話の音が聞こえてきて、俺はズボンのポケットにノートの切れ端を仕舞いこん

だ。

兄貴はもしかしたら、もう——。

張りつめたような表情で電話をかけ続ける母さんに、そんなことは言えなかった。

俺だけが知っている。俺だけが知る、兄貴の行方だった。

掃除は二、三日かかるかと思ったが、案外早く終わってしまった。

「今日で終わると思ってなかったんやけどねえ……」

ガランとした部屋。積み上げられた本の山。ゴミ袋に入った服、CD、ペン、目覚まし時計。立てかけられたギター。その脇に避けられた写真や作文。

写真や作文は、母さんが哲人さんの家に持っていくらしい。

「あー……、明日って、ゴミの日やろ？ これ、もう持ってたとく？」

「そやねえ、アンタが居るうちに、もう出しといた方がいいやろなあ」

明日は粗大ゴミと、資源ゴミの日やから、と母さんは教科書の束を持ち上げた。俺はギターと、本の束を二つ、母さんは本の束を一つ持った。

「アンタ、ほんまにギターいらんの？」

「別にいいって。今借りとする家、壁薄いし。弾き方も、兄貴の見てただけだから、よく分からんし」

そう、と母さんは少しだけ声のトーンを落としていた。外はもう日が落ちかけていて、ほんのりと薄暗かった。

「……今日、月キレイやね」

「そうやな」

あ、ちよつと棒読みだったかも。碌に空を見上げもしなかったからかもしれない。

それでも母さんは気にした様子は無かった。

「そういえば真司、アンタも、もう二十歳よね」

「今更？ 昨日一緒に酒飲んだじゃん」

「もう大人やな」

「……そんな感じ、全然ないけど」

大人。二十歳。そうなったら言おうと思っていて、結局やめた。それが良いと思ったのに、まだ迷っている。あのメモのこと。兄貴の字のことを、母さんに伝えるべきだろうか。

あの時も散々迷った。兄貴の唯一の手掛かり。母さんに見せるべきか、迷いまくった。俺は兄貴がそんなことを思っていたなんて知らなかったし、どうしてそう思ったのか全然分からなかった。分からないまま、母さんに伝えてもいいのだろうか、そんなことをして、これ以上母さんを困らせてしまわないかと。散々迷って、悩んだ

挙句、決めた。

俺と兄貴が同じ年になったら、二十歳になったら、大人になったら、全部分かるはずだ。なんで兄貴があんなことを書いたのか、どうして誰にも言わずに行ってしまったのか、何で月を見てくるなんて急に言い出したのか。全部俺が分かってから、母さんに言おうと十三歳の俺は、決めた。

それなのに、全然分からなかった。

二十歳なんて全然大人ではなかったし、『死にたい』と書いた兄貴の気持ちも、家族を置いてどこかに行ってしまうことも、全然理解できなかった。

だから、俺はまだ迷っている。母さんにあのことを言ってしまうって良いのだろうか。俺だけが、俺だけが秘密を抱えていれば、兄貴はまだ母さんの中で生きていることになるんじゃないだろうか。

ごめんなあ、という声で我に返った。

「お母さんの、勝手に」

「勝手とか、そんなん、違うやろ」

「ううん、ごめん」

「ごめんとか、いいって。母さんには母さんの人生があるし。こういう、片づけだって、結局いつかはするんだし。俺だって、哲人さん、嫌いじゃないし」

「ごめんなあ、真司」

「だから」

母さんは足を止めた。つられて俺も止まる。

母さんは振り返り、すっと目を細めて笑った。泣いているかのようにも見えた。

「ありがとうな、それで、ごめんな」

母さんの丸い背中。風船のように萎んだ姿。震える背中。

ああそうか、と分かってしまった。

母さんは全てを知っている。

兄貴のあの言葉も、ノートのことも、俺がそれを見つけたことも、俺が隠していたことも、全て。

どこで知ったのかは分からなかったが、そうなのだと分かってしまった。

「やっぱりな、謙一は——」

「月の」

声が震えた。

「兄貴はきつと、月の人やったんやろ」

母さんは目を丸くして、こちらを見上げた。気恥ずかしくなって目を逸らし、ギターを背負い直す。それでも何か言わなければならないと、懸命に口を動かし続けた。

「だから、大丈夫や。きつと今頃、月で楽しく暮らしてって、別にいいやろ、どこに行ったのか分からなかったら、月に行っちゃったことにしといても、それで、だから、だ

から——」

母さんがふっと笑う声が聞こえた。

「そうやねえ、今頃、ギターでも弾いとるかもねえ」

「……弾いてるやろな」

「きつと今でも、お母さんたちのこと見とるんかな」

「月に住んでたら、そうかもな」

兄貴は死んだのだろうか。『死にたい』と書いたあの言葉通りに。それとも、俺達の知らないところで生きているのだろうか。

後者であれば良いと思うし、前者であつたとしても俺達には問題ない。

兄貴はきつと、月の人だったのだ。月に帰るために、俺達の前から姿を消したのだ。事実がどうであれ、それが俺たちの答えだった。そう思うことで、すつと何かが軽くなった。

「月、綺麗やな」

久しぶりに夜空を見上げた。

金色の月が、こちらを見つめていた。

【付記】

本作は、第五十一回中国短編文学賞大賞受賞作で、中国新聞2019年5月23日付朝刊に掲載されました。転載を許諾いただきました関係機関に厚く御礼を申し上げます。

—のりなお・まい
日本文学科三年生—

『尾道市立大学日本文学論叢』第14号目次（平成30年12月）

創作

「ミルックラウン」

荒川 遥

小林多喜二「一九二八年三月十五日」
― テクストに見る「伝達」の手法 ―

秋山 千紘

サナギの旅

田端 敏之

研究論文

中世書札礼における「脇付」記述の類似 服部 圭

― ロドリゲス『日本大文典』「女子の消息に就いて」の
典拠調査から ―

平成二十九年度卒業論文・修士論文題目
平成二十九年度三年生研究発表会発表題目
彙報

『温故抄』について

藤川 功和

『温故抄』の錯簡について

財津 奈々

坂口安吾「墮落論」の反響

原 卓史

― 文学史のゆくえ ―

川端康成「虹いくたび」論

潮 崎 文 香

― 作品内のジェンダー・バイアス ―